

シリーズ：その他

心癒やす画像をがん患者へ 福岡のNPO

今井清満 2017年10月10日16時00分



九州がんセンターで放映中の番組。牛尾理事長が編集した＝福岡市南区野多目3丁目



懐かしい里山の風景や、野生の草花などの画像を集めた「癒（いや）し憩い画像データベース」をネット上で運営するNPO法人「癒し憩いネットワーク」（福岡市）が、日本対がん協会（東京）が開いた「がんサバイバー・クラブ」のサイトへ画像を提供している。同協会は「患者を支える力に」と期待する。

日本対がん協会は6月、がんと闘う患者や元患者、その家族らを支援するサイト「がんサバイバー・クラブ」（<https://www.gsclub.jp/>）を新設した。その中に「癒しの空間」を作り、季節の移り変わりに合わせた画像を紹介している。

配信元のデータベースは、国立病院機構九州がんセンター（福岡市）の名誉院長で、NPO理事長の牛尾恭輔さん（73）が2001年12月に始めた。

きっかけはその年の9月にあった米同時多発テロ。殺伐とした映像を見て、心の癒やしが必要だと感じた。国立がんセンター病院（東京）時代、病理画像の国際的なデータベース構築に携わった経験から画像データベースを思い立った。

四季折々の草花、風景など全国の講演先で撮りためた約1万3千件を「癒し憩い画像データベース」（<http://iyashi.midb.jp/>）で公開。NPO設立後の07年10月から動画も本格的に始め、収録数は30万8524件（17年10月2日現在）に上る。1日平均約5万回のアクセスがある。「水の流れ」「懐かしい風景」「名所・旧跡」「自然と動物」など7項目に分けて音声も紹介する。画像はキーワードで検索できる。

「リクエストを聞き、回診の際、パソコンで画像を見ながら話すと、表情が和らぐ」と牛尾さん。心や精神、感情が症状を左右することは珍しくないという。

患者の心を癒やす手法の一つ「ライフレビュー」での利用も狙った。患者が幼少期→学童期→青年期→成人期→現在と人生を回想することで現状を受け入れ、精神の安定につながる。家族や友人、故郷の風景など懐かしい画像を見ながら話すと、より効果が増すという。

見せ方も工夫する。4枚組みの写真を窓からの眺めに例え、短い言葉を添えた「一行四窓（いちぎょうしそう）」を提案。「こもれび（木漏れ日）」「ゆうばえ（夕映え）」など時間や色合いを連想させる4文字の言葉を重視する。濁音が響きに余韻を与えるとともに、呼吸の間隔に合って発声しやすいという。

悲喜こもごもの人生のように、風景は最も美しい季節だけでなく、冬など厳しい環境も撮影する。画像を厳選した『写真でつづる癒し憩い』（海鳥社）も第4巻まで出版した。患者らからの画像提供もあるが、データベースの充実には、09年の同センター院長退任時の退職金を充てた。

この4月には画像を約2時間の番組に編集し、病室やリハビリ室、談話室などで放映し始めた。妻信子さんが描き、牛尾さんがカメラに収めた草花の絵と写真も織り込んだ。信子さんは03年、多発性骨髄腫のため54歳で亡くなった。牛尾さんは「データベースを充実させることは妻への思いもある」。信子さんの一字をもらい「潮信輔（うしおしんすけ）」のペンネームで解説も書く。

こうした牛尾さんの取り組みは新設サイトにも反映され、同じ手法で画像を紹介している。同協会は「患者や家族を支える力になるはず」と話している。

<アピタル：ニュース・フォーカス・その他>

<http://www.asahi.com/apital/medicalnews/focus/>（今井清満）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.